

富山高校物語Ⅰ 「学びの場を我らに！」 若者の願いに、県知事が応えて創校

富山県が置県した明治16年5月には県内に中学校はありませんでした。本県の小学校高等科の卒業生の多くが、進学を断念せざるを得ない状況でした。

置県後最初となる明治17年の小学校高等科卒業式では、出席した国重正文 初代県令(県知事)に、10校の卒業生代表達が口々に直接訴えたのです。

「我らは学ぶに場所なく、遊学に学資なく、進退これ窮まる」

若者たちの真摯な言葉に感銘した県令は、壇上に登り、誓いました。

「諸氏の述ぶるところ誠に理(ことわり)あり。本官は誓って中学の新設に努めん」

当時は全国的な不況下で県財政も厳しい中でしたが、富山県はあらゆる困難を排し、県庁舎建築を後回しにして、置県後わずか1年8ヶ月後の明治18年1月25日に富山県中学校(県立富山高等学校)を創校しました。

県の姿勢に人々は共感し、県予算約三千円に対し民間寄付金は七千円を超え、分県の功労者だった入江直友が総曲輪に校地を提供しました。まさに、県民待望の学校であり、富山県の独立を象徴する学校と言えます。

創校の志「学びたきもの集う」が活きる学校

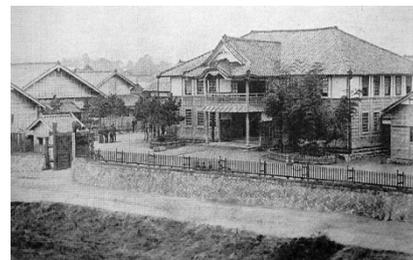
本校の創校の志「学びたきもの集う」は、学びを求めた先輩たちによる**本校の創校の逸話**をもとにするるとともに、**学ぶ意欲をもって集う人々こそが教育の原点**、という普遍的な真理を表しています。

本校生徒は、学ぶ意欲をもって県内各地から集まっています。学習の面で同じ方向を目指して歩むことで、生徒間の信頼感には深いものがあり、仲間で支え合い、学び合い、切磋琢磨することで、能力を大きく伸ばしています。

また、生徒間の支え合いや学び合いをいっそう促すため、ピア・サポート活動に取り組むホームルームや学校行事、協同学習などを取り入れた魅力ある授業を工夫しています。



初代富山県令 国重正文



総曲輪校舎(現 商工会議所付近)



創校当時の生徒たち

創校当時のエピソード 本県初の外国人教員ブラウネルが本校に

本校は、創校時から進学をめざす学校であり、英語・代数・幾何・世界史・地理を英語で教えるなど、進学に必要な英語教育に力を入れていました。

特に、進学に必要な英語会話を高めるため、本県初の外国人教員に選ばれたのが、米国出身でハーバード大学で文学士、スティーブンス工科大学で理学士をとった青年ブラウネルです。

ブラウネルは、明治19年(1886)来日後、東京専門学校(現早稲田大学)などで英語を教えていました。日本人の「本当の内なる精神」を知りたいとの意向に加え、当時の県知事クラスの俸給を用意したこともあり、明治21年(1888)11月に来富し、明治23年(1890)3月まで、本県初の外国人英語教師となったのです。

国際的文化的理解に尽力した生徒たち

その頃の生徒には、日本の英語教育の第一人者となった南日恒太郎や、南日の実弟でラフカディオ・ハーンの弟子・研究者の田部隆次らがいました。南日恒太郎と田部隆次は、後にハーンの貴重な蔵書「ヘルン文庫」[※]を富山に誘致するため尽力しました。多感な少年の頃に、ブラウネルらに教えを受けたことが背景にあったと言えるでしょう。

20世紀初頭に、世界の人々に日本理解を促したブラウネルの著書『日本の心』

ブラウネルは、明治23年(1890)11月から翌年3月まで福井県立尋常中学校(現藤島高校)に勤務後、帰米し、明治33年(1900)頃に大英博物館で学芸員の仕事をしています。

『日本の心』は、明治35年(1902)ロンドンで、翌年ニューヨークで出版されました。明治37年(1904)には、日露戦争で高まった日本への関心を背景に、全米公立図書館の日本関連書籍の貸出数で、ハーンの『神國日本』に次いで2位であり、当時の米国人の日本理解に一定の影響を与えました。

明治の富山・北陸・日本の人々の姿

『日本の心』は、全三十七章のうち七章が富山を描いています。富山での歓迎ぶりや大家さん、葬儀、迷惑な訪問者、子どもの遊び、歌舞伎小屋と役者、音楽、芸妓さん。また、能登の海女や福井の女性の悲劇など、北陸の生活や人情を描く貴重な記録です。

本校が英語教育のために呼び寄せた外国人は、ブラウネルをはじめ大正6年(1917)まで約30年間に6名に及んでおり、開明的な教育を進めました。